

# CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

機能画像によるアルツハイマー病へのアプローチ  
- 何がわかってきたのか、何をしようとしているのか -

脳機能画像診断開発部

伊藤 健吾 部長

平成 23 年 5 月 12 日(木) 午後 4 時 00 分～  
研究所 2 階会議室

脳機能画像診断開発部では、PET, SPECT, MEG, MRI など画像検査法を用いて認知症とくにアルツハイマー病を対象とした研究開発を進めているが、その守備範囲は、トレーサー開発、基礎動物実験、探索的臨床研究、多施設共同の臨床研究まで多岐にわたる。

診断、治療ともにその研究開発は基礎研究から臨床応用までの道のりは峻しく長い。たとえ臨床応用に成功しても研究ベースの臨床応用から健康保険の適用のもと日常診療で用いられるまでにはさらなる道程が待ち構える。基礎研究から臨床研究までそのスペクトラムは広範囲だが、我々が近年重点的に取り組んできたアルツハイマー病の画像診断に関わる多施設共同研究は、より日常診療に近い領域で早期診断法の開発とその有用性の確立に重点を置いてきた。本セミナーではこれらの多施設共同研究を中心に、なぜ多施設共同研究を行うのか、これまで何がわかってきたのか、次に何をしようとしているのかを紹介する。

おりしもアルツハイマー病の臨床診断基準 NINCDS-ADRDA が、提案されてから 26 年ぶりに改定されようとしている。これまでの probable & possible AD の診断基準に加えて、軽度認知障害(MCI)の段階と preclinical すなわち無症候の段階での診断基準(臨床試験用の診断基準との位置付け)が提案されている。いずれの段階においても MRI, FDG-PET, アミロイドイメージングが髄液の  $A\beta$ ,  $\tau$  とともにバイオマーカーとして診断基準そのものに取り入れられ、アルツハイマー病の臨床診断における画像診断の役割は大きく変化している。また、これらのバイオマーカーをアルツハイマー病の根本治療薬の開発において症例選択および治療効果判定の指標として用い、根本治療薬の開発を促進することが期待されている。これらの世界的な動向を踏まえ、長寿医療研究センターにおける今後の画像研究の方向性についても議論したい。

連絡先: 認知症先進医療開発センター  
センター長 柳澤勝彦(内線 5002)